「爆撃」

小町　悦子さん（昭和 7 年生まれ）

昭和十九年、私の通っていた女学校は、中央線武蔵境駅と、西武線田無駅の中間にあり、近くに中島飛行機製作所の大きな工場があった。

空襲のサイレンが鳴ると、生徒達は急いで防空頭布を被り、救急袋を肩に下げ、カバンを持って一斉に下校する。家に早く帰るのが一番安全という学校側の措置であった。私は女学校一年生だった。

その日もサイレンを聞き、同級生四、五人が一緒で急いで駅に向った。

駅までのほぼ中間地点に森がある。丁度その森にさしかかった時、B29 の爆音が聞こえた。突然「ピューン」という風を切る音のあとに「ドカーン」と爆弾の炸裂する音がした。耳をつんざくような音だった。

「私達が狙われている」そう思い急いで雑木林の窪みのある場所に隠れて身を伏せた。目と耳を指で塞ぎ、頭を低くした。土の固まりらしいものが木に当るのだろう。ばらばらと聞えてくる。

みんな無言だった。

B29 は三機ずつの編隊を組んで頭上を通り過ぎて行く。その度に大きな爆弾を落して行った。

地爆音と、炸裂の度のドカン、ドカンという音。少し間をおいてばらばらという落下物の音を何度聞いたことだろう。

艦載機らしい小型の飛行機は、機銃掃射をかけるらしく、機関銃を乱射する音が聞こえる。目と耳を長いこと両手でふさぎ敵機の去るのを待った。

友達は悲鳴を上げ「助けて！」を繰り返えし、最後は「南無阿弥陀仏」を唱え始めた。どれほどの時間だったろう。三十分も続いたのだろうか。敵機は去り、静かになった。みんなの顔は泥だらけになっていた。それでも怪我をした人もなく皆元気で助かったのは嬉しかった。

「今日のは、中島飛行機がやられたのね。あれだけ爆弾を落されたんでは全滅でしょうね」と話し合った。

誰れかが救急袋の中から炒った大豆を出して食べ始めると、みんなそれに連られて食べ始めたが、みんな目は涙ぐんでいた。

「私達こんな時、一緒にいて助かったこと一生忘れないようにしようね」一番背の低く、悲鳴を上げていた青木さんがみんなに指切りを始めた。

駅に向かう道すがら、敵機から電波防害のためにまかれたアルミ箔のテープが畑のあちらこちらに落ちて、それがからまりカリカリ、カリカリと音を立て、日光に照らされてまぶしく光っていた。

電車は運休になり、線路づたいにとぼとぼと私達は歩いて家に帰った。

翌日、学校に行くと幸にも校舎は無事であったが、学校の広い農園や栗林の中に、爆弾の落ちた大きな穴があちこちにあけられ、校庭も恐ろしい大穴のため使用禁止の立札が立っていた。

それから暫くの間、学校は休校になった。

「終戦　八月十五日」

「今日の十二時に、天皇陛下の玉音放送があって、日本人は、一人残らず放送を聞かなければならないのだそうで、お昼のうどん作りを早目に始めるからそのつもりで手伝いしてね」

母は私にそう言いつけると板敷になっているお勝手に、大きな板台を出してうどん作りを始めた。

毎月一日、十五日は農家では「遊び日」になっていた。遊び日には使用人は午後の仕事は休んでお手当なのだろう、お金を渡されるとそれぞれどこかに出かけ行く。

私達子供は小遣いをもらって友達と駄菓子屋に行ったり、たまに使用人に映画に連れて行ってもらったこともある。その「遊び日」にはきまってお昼の食事は手打ちうどんになっていた。八月十五日　その日も遊び日で、私は女学校二年の夏休み中だった。

私はもみがらを燃やす専用の竈に火をつけた。お釜にいっぱいお湯を煮立たせて母の手打ちの麺を茹で上げ、その残り湯で千切に大根と茹子を茹でて、うどんの糧の用意をした。

おつゆの出しの鰹節を削るのは妹の役目だった。

昼食の用意はでき上った。父がお座敷からお勝手にラジオを運んできた。祖母を始め家族全員がラジオの前に座った。

十二時、天皇陛下の玉音は流れ始めた。そのお声はまるで台風の中のお声のようにとぎれとぎれで雑音が混じり、お言葉の意味は全然理解できなかった。

「お父さん、天皇陛下の玉音放送はなんだったの」と尋る私に、父も、「なんだかよく聞きとれなかったなー。何だろう。まあその内わかるだろうよ」

父までがそんな状態だった。

みんな不審を抱きながらお昼のうどんを食べた。

四時頃だったろうか。

「号外！号外！」

鈴を鳴らしながら叫んで走り行く人が居た。門前に散った小さな紙片を拾うと、「戦争終決。無条件降伏」のちらしだった。

なんで戦争を止めてしまったんだろう。日本人は未だこんなに居るのに。あんなに日本人は一人残らず大人も子供も居なくなるまで戦うのだと教えられたのに。どこの家も竹槍を用意して毎日のように上空を飛んで来る敵機の来襲にも愚痴も言わず、必死でここまで守って来たのに、日本が負けたなんて考えられなかった。

「お父さん　日本は本当に負けたって言うけど、これから先どうなるのかしらね」

「判らないなあ、アメリカ兵だって人間なんだからそんな悪いことはしないだろうよ。日本人が負けて何もしないって事がわかれば、人を殺したり、銃を向けたりしないと思うよ」

「もしもアメリカ兵がこの家に来て何か奪って行くような事をしたら、お父さんどうするの」

「その時は黙って持って行かせるんだな」

私は父の言葉が信じられなかった。そんなに父は意気地なしなのだろうか。空襲になる度に村役場にかけつけ、村内の指令に当っていた人なのに、私は不思議に思った。

村の中でもわりと大きな構えのこの家は、きっとアメリカ兵が襲ってくると思い、私はその時は押し入れか蔵の中に隠れようと妹と想談していた。

戦争が終ったことも信じられなかったが、欅の大木に囲まれた我が家の広い庭から見上げた空は青く、その日は不思議にも一機の飛行機が飛んだ様子もなく、本当に静かな一日だった。

戦争が始ってから我が家の使用人は一人、また一人と兵隊にとられて男手はなくなっていた。女中すらいなくなり、私が生まれてこの方始めて使用人の居ない生活をしていた。病身だった母の手伝いは私と妹がした。風呂の水も、お勝手で使う水運びも二人の

役目だった。

　終戦から二年後母は亡くなった。

　八月十五日が来る度に家族全員が揃って暮らしていたあの時のうどん作りの光景が鮮明に蘇り、戦争中とはいえ平和で幸せだった家庭が想い出されてならない。

令和６年５月 31 日　寄稿